

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00114

研究課題名（和文）南宋における正統論の再検討：蕭常『統後漢書』を手がかりに

研究課題名（英文）Re-examination of Zhengtonglun in the Southern Song Dynasty: Based on "Xu Houhan Shu" by Xiao Chang

研究代表者

田中 靖彦（TANAKA, Yasuhiko）

実践女子大学・文学部・教授

研究者番号：40449111

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、蕭常『統後漢書』を主な手掛かりに、南宋における正統論の展開を三国論という観点から検討した。蕭常の史論は蜀漢を高く評価する傾向が強いが、そこに朱熹の影響を見出すことは難しい。しかも蕭常は時として、蜀漢賞賛よりも南宋代における価値観を優先した人物評価を行い、蜀漢の人物を批判する場合すらあった。また、同じく南宋の人である李燾らの史論からは、南宋の現状を検討する鑑戒として、南宋と地理的境遇の類似した孫呉に注目するという三国論も存在したことが見出せる。このように、南宋においては蜀漢正統論とは異なる三国時代評価も見受けられることは注目すべきであろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、(1)史料論的側面、(2)史学史的側面、(3)思想史的側面という三つの側面から研究に取り組んだ。(1)については、従来あまり顧みられてこなかった蕭常『統後漢書』の史料性格を論じ、その優れた点と欠点をあわせて指摘するという意義を持つ。(2)については、「南宋における正統論の展開」という史学史的側面からの研究を行い、よく知られている「南宋における蜀漢正統論の台頭」とは異なる側面を持つ三国論としての孫呉論の存在を指摘するという意義を持つ。(3)については、東アジア思想史において重要な位置を占める朱熹の役割について、南宋の蜀漢正統論に対する朱熹の影響力について再検討を促すという意義を持つ。

研究成果の概要（英文）： This research examines the development of Zhengtonglun, the discussion about legitimacy, in the Southern Song from the perspective of the discussion about the Three Kingdoms period, using "Xu Houhan Shu" written by Xiao Chang as the main reference. In many cases, Xiao Chang appreciated Shu Han based on his historical perspective, but it is difficult to find Zhu Xi's influence there. Furthermore, at times Xiao Chang criticized individuals in Shu Han based on the values of the Southern Song rather than his historical viewpoint. Additionally, some people in the Southern Song, like Li Tao, regarded Sun Wu as a model for the Southern Song due to the similar geographical circumstances between Sun Wu and the Southern Song. It is important to note that in the Southern Song, there also existed views about the Three Kingdoms period that differed from the perspective that considers Shu Han as the legitimate dynasty.

研究分野：中国史学思想

キーワード：正統論 三国論 蕭常 統後漢書

## 1. 研究開始当初の背景

現在でも普通に用いられる「正統」の語であるが、この概念は宋代に萌芽した。歴代王朝の「正統」を巡る議論は正統論と呼ばれるが、この中でも、曹魏・蜀漢・孫呉が鼎立した三国時代については、蜀漢を「正統」とする理解、いわゆる蜀漢正統論が朱熹を画期として確立・普及したとするのが定説である。例えば、『四庫全書総目』の『三国志』の項は、「朱子以来、(魏を「正統」とする)陳寿を非とし(蜀漢を「帝」とした)習鑿齒を是とせぬ者はない」といい、南宋で斯かる論が支持された理由を、南宋が江東に割拠した状況が蜀漢に近く、一方で曹魏の領土であった中原が金の領土となったことに求めている。かかる見解は、現在でも定説と言って良い。

蜀漢正統論的な史観が南宋以後に大きな傾向として認められるのは事実である。しかし、果たして南宋において突然、朱熹の影響によってその傾向が主流を占めるに至ったのであろうか。南宋代における三国時代論を実際に見てみると、必ずしも朱熹の影響を受けたものばかりではないことに気づく。となれば、朱熹以外の人物の著作・史論を通して同時代の三国時代評価を検討することは、単なる南宋における蜀漢正統論という現象の検討という枠にとどまらず、南宋における正統論の展開を多角的視野から捉えるために有効な作業なのではあるまいか。

本研究は、上述のような背景に基づいて行われたものである。

## 2. 研究の目的

本研究の大きな目的は、(1)南宋の蕭常の史観を、彼の著書『続後漢書』を通して分析すること、そして、それを一つの手掛かりとして、朱子学の影響力といった要素も含め、(2)南宋における正統論の形成・展開について、三国時代をめぐる議論(以下「三国論」という切り口から考察することにある。

(1)蕭常の史観についてであるが、これまで、蕭常『続後漢書』は、その蜀漢を支持する筆致が多く指摘される一方で、それ以外の点についてはあまり顧みられることがなかった。本研究は、同書を丹念に研究することにより、同書の史料としての特徴や、そこから読み取れる歴史観についてさらに分析を深めることを目的とする。

(2)南宋における三国論から見た正統論についてであるが、単なる『続後漢書』の分析という枠にとどまらず、「南宋に至って蜀漢正統論が隆盛した」という『四庫全書』以来現在まで続く定説を再検討することを目的とする。蕭常『続後漢書』の史論は、南宋代における他の論者と比べて、どのような共通性と独自性があるのか、あるいは無いのか。かかる点を軸として、南宋における三国論の展開を手がかりに、正統論という中国思想史の大きなテーマに取り組むことが、本研究の大きな目的である。

## 3. 研究の方法

上述の目的のうち、蕭常の史観の研究については、蕭常『続後漢書』の史料読解が主な方法となる。とくに、各本紀や列伝中において展開される「賛」は、蕭常の史観を直接うかがうことのできる重要な箇所である。また、序や自記(後述)といった、同書執筆の経緯や動機について蕭常が述べた箇所も、重要な示唆を与えてくれる。

また、この『続後漢書』は、陳寿『三国志』および同裴松之注などの先行史料を参照した部分が多いが、斯かる点についても具体的な分析を行い、蕭常が先行史料をどのように利用して『続後漢書』を編んだのかという、史料の構成についての分析も行う。

南宋における三国論から見た正統論については、蕭常の著作に限らず、南宋代の論者の著述から読み取れる三国論や正統論についての調査を行い、蕭常の史論との影響関係や特徴の異同について分析を行う。

一方、当初予定していた研究方法のうち、現地調査が実施できなかったことは残念であった。当初の予定では、史料研究に加え、蕭常の郷里である廬陵(現在の江西省吉安市)への現地調査を行うことを計画していたが、コロナ禍や昨今の国際情勢などを鑑み、研究分担者と相談の結果、現地調査は断念のやむなきに至った。

## 4. 研究成果

### (1) 自記、序文、『四庫全書総目』について

『続後漢書』は最終巻の最後に、著者である蕭常本人が同書を著すに至った経緯が述べられた段がある(本研究ではこれを「自記」と呼称する)。司馬遷『史記』以降、史書の最終巻を自序とすることは広く行われており、蕭常もそれを意識したと思われるが、蕭常の場合はそれが特に顕著である。自記がどこまで内容的に信憑性を持つかは判然としないが、彼の史観を理解する上では重要史料である。また、蕭常と同郷である周必大は『続後漢書』に序文を書いており、ここからは当時における同書の受容の一側面を窺うことができる。そして『四庫全書総目』は、清朝乾隆帝期における同書への評価を端的に示す定番史料である。これらの史料からは、以下のような点が明らかになった。

：同書の蜀漢正統論は、蕭常の自記の内容を信ずるならば、彼の父の影響が大きい。

：蕭常の自記を見ても、周必大による序文を見ても、蜀漢正統論の立役者を朱熹とする認識は見て取ることができない。それどころか自記によれば、蕭常の父は「陳寿の『三国志』が世に出て千年にもなろうというのに、一人もその(蜀漢を貶め魏を尊ぶという)誤りを正す者がいない」と言っており、これを文字通りに捉えるならば、当時は尊蜀を主張する論が皆無だった(少なくとも蕭常の父は未見だった)ことになる。無論この蕭常の父の言葉は、自説の先進性を強調するための誇張という側面もあるが、南宋における蜀漢正統論の展開を朱熹中心に捉える従来の理解を再考する上で、重要な史料と捉えられる。

：『四庫全書総目』は、『続後漢書』の蜀漢を中心に据えた筆致を高く評価しているものの、実は『続後漢書』の中身を精査してはいないと思しき節がある。

## (2) 『続後漢書』本文の構成の分析

続いて本研究では、『続後漢書』本紀一・昭烈皇帝紀を主要材料として、その構成を確認し、編纂手段を検討した。その結果として、主に以下のような成果を得た。

：『続後漢書』は基本的に『三国志』などの先行史料をベースとした内容になっている。ただし、『漢書』を参照して『三国志』の誤りを正すなど、単なる先行史料の丸写しにとどまらないように努めた蕭常の執筆姿勢も確認できる。

：劉備のことを「昭烈」と呼ぶことが徹底されている点や、彼の暴力的な側面を採録しない点などからは、劉備を美化せんと意図が濃厚に看取し得る。加えて、蕭常が劉備と曹操との若き日の良好な関係にあまり触れたくないのではないかと思しき執筆姿勢も確認された。

：昭烈皇帝紀の興平元年の条に「曹操が荀彧・程昱らに豫州を攻撃させ、昭烈(劉備)は荀彧らに敗北した」という記述があるが、管見の限りこれに類する内容を述べた史料は他に存在しない。恐らく、蕭常が原史料(おそらく『三国志』)を誤読し、それをそのまま自著に書いてしまったと思われる。こういった点は、後世において蕭常『続後漢書』がその史料としての価値を認められなかったのも仕方ないと思わせるものがある。『資治通鑑』とは異なり個人による著作としては検証にも限度があったということなのかもしれない。

## (3) 『続後漢書』賛の分析

蕭常の三国時代および人物に対する評価を探るべく、『続後漢書』の賛の分析に取り組み、以下のような点を明らかにした。

：蕭常は、諸葛亮評価に関して朱熹と張南軒が議論を交わしたことについて知っていた可能性があるが、『続後漢書』諸葛亮傳の賛において蕭常は、張南軒の説を多く引用する一方で、朱熹の諸葛亮評価については一切言及しない。このことは、当時における三国論をめぐる当時の論者たちの影響力を考えるうえで、非常に興味深い。

：帝紀一の賛は、蕭常独自の論が展開されているが、その内容は劉備個人への評価というより、漢王朝賛美と、漢王朝延命への肯定評価ともいべき内容になっている。そこからは、南宋の現況を蜀漢に(願望をこめつつ)投影していることが窺えるのであり、同様の特徴は帝紀二の賛にも見出すことができる。

：基本的に蕭常は、蜀漢人士を高く評価し、曹魏人士を厳しく批判するが、蕭常の人物評価には、時として斯かる王朝の枠にとらわれない場合がある。その評価基準とは主に、婚姻や忠義を巡る当時の価値観に基づくもので、例えば、列傳一(后妃諸王傳)の賛では劉備と呉懿の妹の婚姻を手厳しく批判し、「昭烈が天下を統一できなかったのは、彼を正す賢臣がいなかったからであろうか」とまで言っている。一方で呉載記第二の賛では夫の仇を討った孫翊の妻・徐氏を絶賛し、魏載記第二の賛では、曹髦に忠義を尽くして処刑された王経と彼の母に対し惜しめない賛辞を贈る。蜀漢を肯定的に論ずることを目的とした同史料でありながら、斯かる人物評価が展開されることから、蕭常をはじめとする当時の士大夫たちの価値観をうかがい知ることができる。

## (4) 南宋における孫呉評価について

蕭常『続後漢書』は、蜀漢を最も高く評価し、曹魏を最も厳しく批判するが、孫呉に対しては、曹魏ほどは強く否定しない姿勢を見せている。斯かる点を踏まえて他の南宋人士の孫呉評価を見たとき、当時の南宋では孫呉に着目した三国論が存在したことが確認できる。

『続資治通鑑長編』の著者として名高い李燾には、『六朝通鑑博議』という著述がある。同書は孫呉を中心に三国時代を論じているが、斯かる論は、南宋と地理的境遇に近い孫呉を論ずることと南宋の採るべき道を論ずるといった性格を持つ。そして呂祖謙にもまた同様の観点からの著述である「十論」がある。本研究では、この『六朝通鑑博議』および「十論」を分析対象とした研究にも取り組み、この両者には、孫呉を中心とした三国論、蜀漢鼻疽的性格の不在、正統論の不在、南宋の対金政策の投影という四つの特徴があることを明らかにした。そして、李燾と呂祖謙が斯かる論を展開した背景には、彼らの学术交流が影響を持ったであろうことも指摘した。

宋代以後の三国論を見たとき、後世に対しこういった孫呉論が大きな影響力を持たなかったのは確かである。だが、『六朝通鑑博議』や「十論」の存在は、従来言われてきた「南宋と蜀漢は置かれた状況が類似していたので、南宋では蜀漢正統論が台頭した」という理解には再考の余地があることを物語る。

## (5) まとめ

研究期間全体を通しての研究成果としては、これまであまり着目されてこなかった史料である蕭常『続後漢書』の史観・筆法に関する分析を進めるという史料論的成果と、南宋における正統論の展開の検討を通して、従来の研究ではほぼ顧みられることが無かった「南宋における孫呉評価の存在」に光を当てるといふ史学史的成果、そして、これらの研究を通して、南宋における三国論がただちに蜀漢正統論一辺倒となつたわけではないこと、蕭常には蜀漢賛美よりも優先する価値観があつたことを論じ、そして朱熹の影響の再検討を促すといふ思想史的成果をあげ、南宋における正統論の展開をより多角的・立体的に捉えることができたと考えている。今後は、上述のような成果を踏まえつつ、蕭常『続後漢書』の未精査部分の研究を含め、南宋の諸史料を手掛かりとした三国論をめぐる研究を進めていきたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 田中 靖彦	4. 巻 42
2. 論文標題 『六朝通鑑博議』の孫呉論について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所年報	6. 最初と最後の頁 33～64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002445	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中 靖彦	4. 巻 100
2. 論文標題 蕭常『續後漢書』諸葛亮傳贊について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 實踐國文學	6. 最初と最後の頁 114～138
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002309	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中 靖彦	4. 巻 41
2. 論文標題 蕭常『續後漢書』帝紀および列傳一の贊について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所年報	6. 最初と最後の頁 195～212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002294	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中 靖彦、石井 仁	4. 巻 99
2. 論文標題 蕭常『續後漢書』昭烈皇帝紀についての覚書	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 實踐國文學	6. 最初と最後の頁 30～42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002244	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中 靖彦、石井 仁、中本 圭亮	4. 巻 97
2. 論文標題 蕭常『続後漢書』の基礎的研究 序および四庫提要の分析を中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践國文學	6. 最初と最後の頁 50～68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/1157.00002152	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中 靖彦	4. 巻 75
2. 論文標題 呂祖謙「十論」の孫呉評価について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 106～120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中 靖彦、石井 仁	4. 巻 104
2. 論文標題 蕭常『續後漢書』呉載記第一・第二の贊について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 実践國文學	6. 最初と最後の頁 34～47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/0002000048	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中 靖彦、石井 仁	4. 巻 43
2. 論文標題 蕭常『續後漢書』魏載記第一・第二を巡る一攷察	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 実践女子大学文芸資料研究所年報	6. 最初と最後の頁 123～155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34388/0002000159	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中靖彦
2. 発表標題 南宋における孫呉政權論をめぐる一考察
3. 学会等名 日本中国学会第74回大会発表
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 富谷至（責任編集）、吉本道雅、宮宅潔、鷹取祐司、石井仁、ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 290
3. 書名 岩波講座 世界歴史 5 中華世界の盛衰 4世紀	

1. 著者名 三国志学会（監修）、石井仁、田中靖彦、ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 221
3. 書名 曹操 奸雄に秘められた「時代の変革者」の実像	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	石井 仁  (ISHII Hitoshi)  (90201912)	駒澤大学・文学部・教授    (32617)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	中本 圭亮  (NAKAMOTO Keisuke)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関